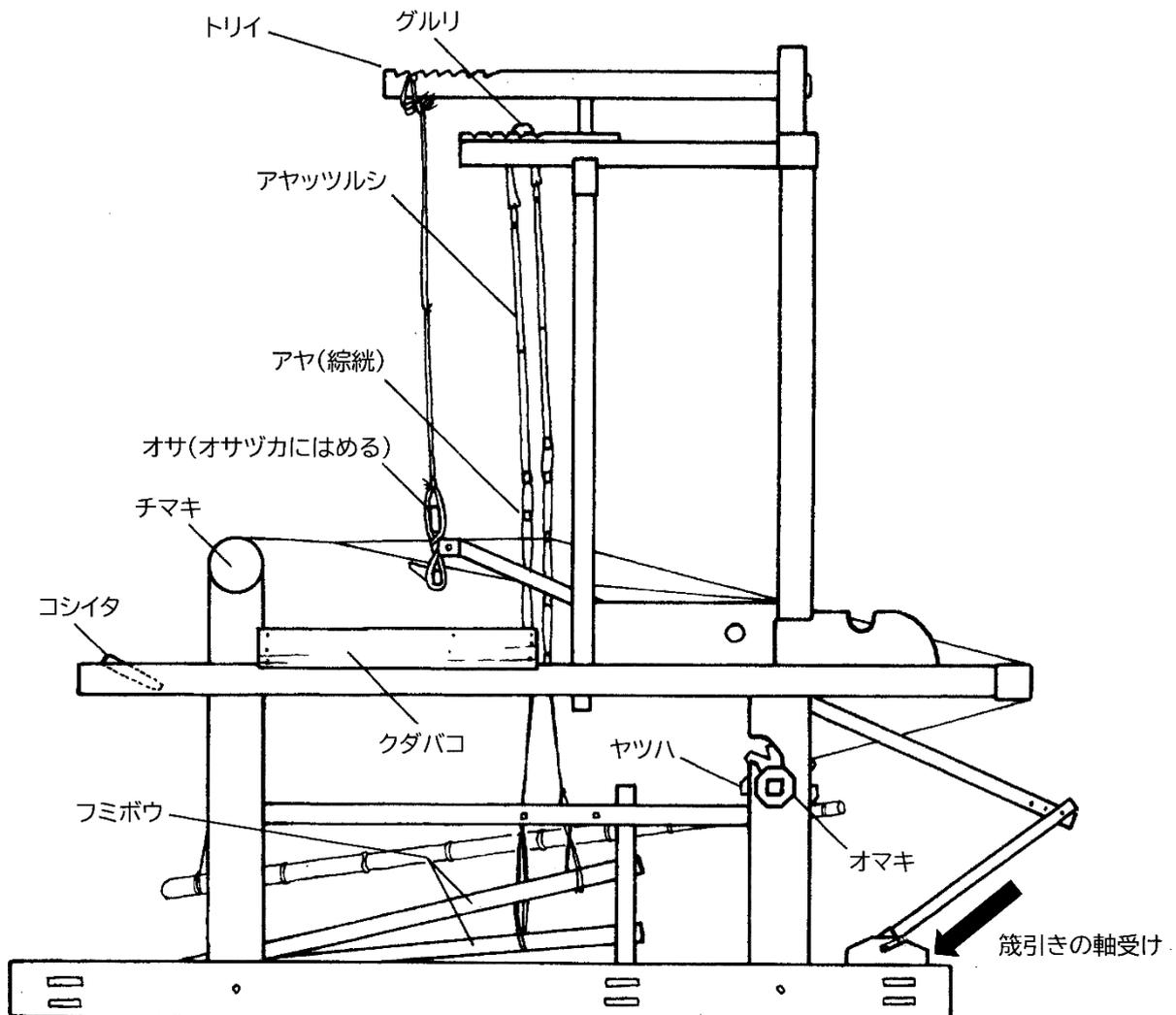




2026,3,1 ハタシの修繕と拵織り

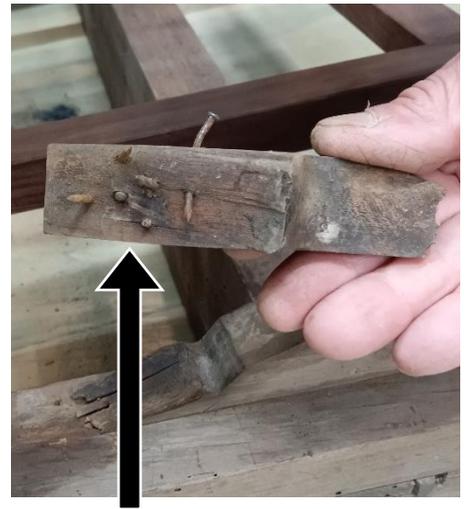
突然ですが、アクシデント発生! 所沢飛白の復元では、明治20年(1887)頃につくられたハタシと呼ばれる高機を使用していますが、長いこと働かせたために悲鳴を上げたのか、箴引きの軸受け(下図の矢印で示した部品)が木目に沿って斜め真っ二つに割れてしまったのです。よく見ると、旧所有者が使っていたときすでに割れていたようで、旧所有者は何度も割れた部分に釘を打って修繕しながら使っていたようです。その釘がハタシの台木から抜け、再び割れてしまったのです。これは、もう釘を取り除いて接着し直すしか手はありません。山口民俗資料保存会の小山会長が自宅から釘抜きを持ってきてくださり、大奮闘の末に何とか釘を取り除くことができました。

まず、斜め真っ二つに割れた軸受けの下部をハタシの台木にボンドで接着し、続いて上部をのせて接着。このまま静かに固定するのを待つことにしました。完全に固定したことが確認できたら、様子を見ながら拵織りを再開します。

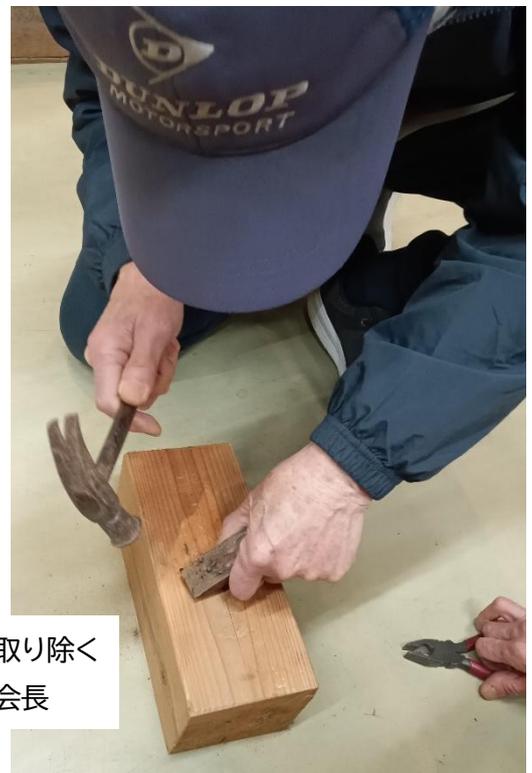




箴引きの軸受けが斜め真っ二つに割れた!



割れた軸受けの上部にはたくさんの釘が打たれていました



釘を取り除く
小山会長



軸受けの下部を
台木にボンドで接着



上部をのせてボンドで接着

本日は、次に織る「井桁」の緯系の緋縛りを行ないました。

所沢飛白は、経系・緯系ともに緋系を作って組み合わせる「経緯緋」(たてよこがすり)で、緯の緋系を作るには、ワクッチバリと呼ばれる大枠に晒した白綿糸を巻き、これにカタボウという定規を当てて墨で緋のしるしを付けます。このしるしを防染材の麻できつく縛り、藍で染めてほどくと、縛った部分が白く染め抜かれるのです。

緋縛りでは、糸の束がねじれないように左手の親指と中指で束をしっかりと押さえ、人差し指で麻を向こう側から手前へと送り、手前に来たとき強く引いて締めます。そして、最後に輪を作って麻の端を通し、ギュッと締めて結び目ぎりぎりのところを切ります。

ワクッチバリの大枠は、枠脚の角が鋭角に尖っているのが特徴です。角から角までの一辺は織り幅に等しいので、一周り四辺が緯系四段分となるのです。

緋縛りは地味な作業ですが、きちんと正しく縛っておかないと染めむらができたり、染めている途中で防染材の麻がほどけて緋が失われたりするので、とても重要な工程なのです。

4月5日(日)の活動日にも引き続き緋縛りを行ないます。また、修繕したハタシでの緋織りも再開しますので、どうぞ見学にいらしてください。お待ちしております!

所沢飛白勉強会 宮本八恵子・小峰和子



ワクッチバリの大枠を使って緯系の緋縛りを行なうようす